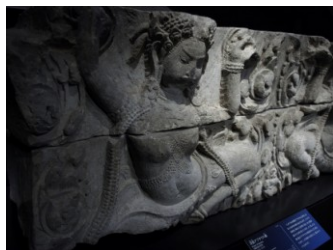


土の壺石の筒

しづや
りふかふ



時経りし書籍には趣があるものだ。

手書きの半紙本、木版刷りの梵字集、百数十丁を綴じた仏典論蔵の写、江戸期写本の藤原定家詠歌集、琳派系と思われる色刷りの木版画、河鍋曉斎の浮世絵、書簡・書画・錦絵、古筆の断簡やら粘葉（りゅうちよう）、さらに古くは鎌倉・室町など和紙に洩れたる墨蹟、金銀塗（まぶ）す卷子（かんす）、破れたり解れたり捲くれたり折れたり剥がれたりするも、「羅は上下はつれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそ、いみじけれ」と徒然の草にもあるよう、



寂たる風情何とも言えず味わい深くて汲めども尽きぬもの。

とは言え、借りた本は返しに行かなくてはならない。さても赴かんとする日、冷たい、シャーベツト状の雨。みぞれだ。いやいや、これはもう、雪だ。きりさめしようにうた霧雨蕭々太くんに関わると、いつもこうだった。

凍てた空気が氷つて霧のように曇って見え、幽玄にて趣も佳き哉、と言えなくもないが、彼の蔵する書籍全般どれも儚くもろい古文書級のモノばかりたるを慮れば、借りる度に雨やらみぞれやらの降る中を歩くは、保存上、到底良きとは言えぬありさま。

などと、つらつら考えながら、粥いくな那伊與璃よりは桜が咲き乱れるも曇り

空が雪となって降るこの日、実家の玄関を出た。冷めたく潤って澄んだ空気が清々しい。嫁ぎ先と実家とは数十メートルの距離だ。頻りに出入りしても違和はない。しかも最近、離縁したし。

伊與璃の元夫は安蘇生井家あそうまいの三男で、幼馴染で、細身で背が高くて、自動車整備及び販売会社に勤務する敦史だった。二十三で結婚し、二十五で離婚したのは、車好きで、高級時計も好きで、常に香水とシルクとを身にまとう男であつた夫が飲食業の女性と出奔してしまつたからである。

敦史の性分を思うに、女性に騙されたと言うよりは騙して縁りを結

び、事に及んだのであろう。さよう推測する。

義父も義母も泣いて謝り、息子とは縁を切るから家に残って欲しいと懇願され、やむを得ず妥協し、戸籍上は粥那姓に戻ったけれども安蘇生井を名乗って義父母と暮らし、今日に至っている。

神栖檜^{かみす}樞^ひ村^{かが}安蘇生井本家は長男も次男も外国で現地の企業に就職し、帰る見込みがない。伊與璃と敦史の間には子供もなかった。継ぐ者もなく、取り敢えず伊與璃がいなければ、本家と雖^{いふれども}もたちまち潰えてしまうのである。

結婚は伊與璃の親族すべてから反対されていた。

粥那家はその本流は伊釵いせ敝家へいにあり、伊釵敝は中央政權の重臣の流
れを汲あむ者で、天津神を祖とする家柄であるに、安蘇生井は地祇（く
につかみ）を祖とし、元を糺せば、まつろわぬ一族の出であつたから
である。

アソウマイとは火山を意味し、アソウマイ族は中央政權ができる以
前に火山信仰を持って日本に定住した一族である。太古に於いては中
央政權の立つ場所は彼らの住む地域であつた、はずだ。記録がないの
で何もわからない。在ったかもしれないが、少なくともいまは残つて
いない。

「人は移動するし、血は常に混じり合い、複合するし、事象を精確に辿るなら、すべての歴史的事象は複雑系的に複数の要因によって、時間の推移に伴う遷移を絡めながら、しかも諸要因ごとに発生の時差があつて、時差含みの遷移を経ながらも、なおかつ諸要因相互に他の諸要因によつて複合的に成立しているわけだし、始まりなんてわからないわ。それをお願い、とてもとても一様に語れるようなものではないわ。それをお考え、例外なくすべての短絡的な思考が愚かであることは瞭かなのよ。事象に還りなさい、つて言いたいわ。そうよ。

現に、山盛弊^{やもりべ}のような、先住していたけれども、早くから中央に恭順

して恭順派の古参・重臣的な存在になった、安蘇生井と伊釵敵の中間のような存在もあるし、それに、そういう意味では伊釵敵も同じで、ただ恭順した時代（征服された時代）が逆れないくらい古いというだけなのよ。だから本当は様々な事があつて、様々な想いが滾っていたはずだわ。

けれども歴史に残るのは、ただ伊釵敵が神栖檜偃の海を護り、山盛弊が神栖檜偃の山を護っていた、という中央の権力者の記述だけ。

でも、もういまは誰が誰でもない。結婚の失敗なんか何も関係ないわ。笑い種ね。いま在るのはもっと身近で、もっと事実的な、ただの

事実だけよ」

と独りごちつつ傘を強く握って歩む。ちなみに霧雨家もまた安蘇生井の系列である。

旧街道の松並木やら椎の木やらが繁つて鬱蒼とする中、旅籠の跡地に来る。そこは去年まで蕎麦屋に改装されていたが、しかし倒産し、夜逃げして廃墟だ。少し気味の悪い感じがある。それもそのはずだ。かつてそこでは人斬りがあつたのだ。と言つても幕末の話であるが。
むなかた
それは彼女の曾祖父の曾祖父である宗像の手記によつて生々しく知られる。彼の友人であつた安蘇生井正蔵は宗像に貸した本を返しても

らうため、安蘇生井家を出でて、いまの彼女と同じ道を辿っていた。そして同様にこの街道を歩み、旅籠近くに来てただならぬ気配を感じたというのである。当時は、人斬りがあつてから一〇年とは経っていなかった。それゆえ正蔵の悪寒は差して不思議もない。

しかし伊與璃の感覚は理解し難く強烈であつた。彼女は突然、運命の高山の嶺に立ち、数千兆光年に涉つて巨大に横たわる過去と未来とを俯瞰したのである。言葉では追いつけず、思惟よりも速く、走馬燈のように様々な現象が脳裏を駆け廻る。激しい眩暈を覚える。

すべてが鮮やかで、リアルであつた。時間は止まっていたが、静止

という凄まじい速度で過ぎ去っていった。

それはあつという間に終わる。

彼女は暫時、雪の中にたたずみ、茫然とした。

あの強い現実感覚、凄まじい光芒のようなもの、聖の聖なるまでに神々しき刹那、あたかもあの一瞬に因つて永劫の過去と永劫の未来とがビッグバンよりも凄まじい勢いで拡がり做り為されたかのような、劇烈な現実感覚であつた。

明治元年のことである。正蔵は貸した有像あいらの読本よみほんを返してもらうために雪の降る正月、いまで言う二月に伊釵敝家へ向かうこの道を歩いていた。旧暦一月八日と録される。

その途中、伊與璃と同様に旅籠屋に差し掛かった。当時は旧街道も旧ではなく、街道の両脇の並木も規則正しく列し、鬱蒼と繁って夏に涼をもたらし、冬に雪を防いだ。四辻に近い旅籠屋や茶屋の集まったそこは殊に鬱々とし、人斬り以降は閉じてしまった旅籠は沈として時が止まったかのようなであった。その脇の茶屋も横変死を忌みて店をたたんでいた。まったく人氣がなく、がらんとしていたのである。

そして彼もそこで不吉な気配を感じた。

とは言え、旅籠 あらはば “新巾や” で起こった斬殺事件は当時、まだ生々し

い記憶である。正蔵が気味悪く感じてしまうのもさほど不思議ではないし、彼もまたそう思った。しかし近附くほどにじっと見られているかのような感じ、慄然とする。どうしようもなく膚が粟立つのである。けして寒さのせいではない。

彼はずっと眼を逸らしていたが、勇気を奮って、と言うか、どうにも見上げずにはいられず、脱藩浪士であつた安蘇生井真壮 まさか が斬られた二階へと眼を向けた。

万延元年のことである。

真壮は藩の軍奉行添役、伊釵けいちよう敵慶長と密会していた。慶長は名家の出身で、ゆくゆくは家老に、とまで言われた男である。当時、檜へ偲い藩は進路を迷って喧々囂々、しかも事態は逼迫していた。一刻も早く態度を決せねばならない。決断は藩の興亡に関わる一大事であった。

知られたとおり幕末と言えば、佐幕・尊皇・攘夷とに意見が分かれ、国が大紛糾していた時代である。憂国の烈士は当時死罪にもあたる脱藩の罪を犯してまで、国のために奔走した。そしてそういう罪人の意見をも聴き、国家の命運を自身の保身よりも重んじる一部の有識な重

臣がいた。

これが日本の運命を救ったのである。

さて当時、檜隈藩の周囲の状況はと言えば、ほとんどの藩が佐幕派で、唯一、久保田藩のみが尊攘派への動きを見せていた。檜隈も久保田同様に、平田篤胤の多大な影響を受けており、藩の有志たちは久保田と結んで尊皇攘夷へ藩論をまとめようとしていた。その趨勢は、海外事情に通じていた一部の重臣たちの意向にも適い、たちまち大きな勢いとなった。しかし若干二十歳の藩主、韋坐宣永いざよしながは一徹固陋な若者で、頑として恩義ある幕府を佐けることを主張し、佐幕に固執してい

た。

啓明なる慶長が真壮と会おうとしたのは、日本国内を東奔西走するこの脱藩浪士から江戸及び京都の様子を覗うためであつた。

「安蘇生井どの、よくぞ無事であつた」

「軍奉行添役、伊釵敝慶長さま、宜しくお手引きしていただいた御蔭です」

「さて、いかがあるう、幕府の様子は」

「一月に日米修好通商条約の批准書を交換するため、外国奉行及び神奈川奉行を兼帯していた新見正興どのと村垣範正どの（いずれも安政

六年（1859年）九月、任命。）を各々正使及び副使とする遣米使節が
ジョサイア・タットノール代将を司令官とし、ジョージ・ピアソン大
佐が艦長を務める米海軍艦ポーハタン号で出発しました。

これに併せ、勝海舟さまが福沢諭吉どの、ジョン万次郎などとともに
幕府の艦、咸臨丸に乗り込み、護衛を名目上の目的とし、米利堅合
衆國へ行かんと、太平洋を横断の行に赴いたことは既にお聞き及びか
と思います」

「さよう」

「また使節には、目付として小栗忠順どのが任命されておりますが、

これは目付本来の不正の有無を監察するに非ず、非公式に通貨の交換比率を交渉せよと命ぜられたとの情報です」

「ふうむ。ありそうな話だ」

「また、三月、桜田門外の変にては幕府の大老、井伊直弼どのが暗殺されましたこと、既にお聞き及びかと。幕府の権威は大きく失墜したと、世に囁かれています」

「むろん。」

承知だ。ついでには三月十八日（1860.4.8）に万延に改元したことと合わせ、知らぬ者もないであろう」

「改元に関しては、江戸城火災などの災異のためもあります」

「それも聞いておる」

「閏三月十九日（1860.5.9）に幕府は五品江戸廻送令を發布しました。これは昨今著しい物価の高騰を抑制する試みと思われます」

「さようだな」

「日本國米利堅合衆國和親條約（にほんこくめりけんがつしゅうこくわしんじょうやく）による下田と函館の開港以来、日本国の生糸が数多輸出され、価格が大いに高騰するなど、主因とされます」

「さよう、さよう」

「かような一連の動きの中、四月十日（1860.5.30）、万延小判が通
用を始め、金銀の交換比は諸外国とほとんど同一となり、交換比率の
差異による日本国の不利益、金の流出などに一定の効果があつた模様
です」

「ふうむ」

真壮は憂い、落胆していた。慶長は時代を少々超えた雄と言つてよ
い、賢明な男である。藩の官でありながら、本来なら藩内に入ったこ
とが知られば捉えられ、斬首されるべき真壮のような脱藩浪士と、
こうして面会し、経済や外交の情勢を聞こうとするなど、当時として

はかなり優れた時代感覚の持ち主であつた。もしこれがただの侍なら、脱藩だけでも死に値するのに、その上、汚らわしい外国や経済の話など、以ての外、即刻斬り捨てられ、唾吐かれるだろう。

しかしその男でさえこのありさまである。わかっているような、知つてゐるような返事をしながらもよくわかつていないこと相違ない。

真壮は言葉を続けた。

「日米修好通商条約は、日本国に在留する米利堅人が起こした事件を米国の領事が米国の法に則つて裁く権利を認め、我が国の関税権の自主などを謳わぬ不平等条約です。

しかも勅許の無いまま締結したこの条約ゆえ日本国内は内紛して大いに乱れ、大老井伊どのが派閥抗争鎮定のため反対派の幕臣やら公家衆を大量に処罰（安政の大獄）し、反って政局は不穏となり、先も申し上げたとおり井伊どのは桜田門外にて暗殺されてしまいました。

かような事態に及んでも朝廷は条約を認めず、尊王攘夷においては条約の廃棄が叫ばれ（破約攘夷論）、幕府も開港の延期、又は中止を求める交渉を慌てて始める次第。さりとて欧米がこれを受諾するとは思えず、いずれは米英仏蘭四力国艦隊が我が日本国のいずれかの海に侵入し、条約勅許を要求するは必定でしょう。

かような情勢、諸般の事情を鑑みるに、佐幕はもはや虚し。

幕府威信低下のいまこそ立つべきなのです。日本を奪回すべきです」

「貴殿の主張は、尊皇及び攘夷に向けて藩論をまとめよ、と解してよいか」

「畢竟、倒幕をせんと行動すべきかと」

「ううむ」

さすが慶長も露骨に倒幕という言葉聞いて呼吸が止まり、惶れに顔を顰め、唾を呑み込む。

「伊弉敝さま、つまるところ、尊皇と言い、佐幕に反するというのは、

倒幕ということなのです。ただ言葉が露わでないか否かの相違に過ぎぬのです。

いま決断せば、我が藩は百年の憂き目に遭うでしょう」

「わかつておる」

真壮の本意は倒幕であつた。

かくも真壮が佐幕から変節したのは、実はかような国内外の情勢に拠るものではなかった。阿曾瞑神社に遺されていた旧事紀を読んでからである。旧事紀といつても大和や奈良時代のものではない。鎌倉の世のものだ。

そのとき幕府の手引きで藩に雇われた暗殺者が旅籠の玄関を叩く。

「夜分に申し訳ないが、本日一夜の宿を探しておる」

「へい、かしこまりました。どうぞお入りになつてください。番頭さんを起こしてまいります」

応対した清兵衛という使用人は番頭を起こしに行こうと背を向けた途端、斬られた。実は番頭は早くから理由も知らされずに外へ連れ出され、旅籠には居なかった。

その断末魔の声は荒々しく塞がれ、数人の侍たちがどやどやと階段を上がった。真壮と慶長が異変に気付き、刀を手に取ったときにはも

はや障子が斃され、一の大刀が振り下ろされた。かくして軍奉行添役さえもともに斬殺される異変となつたのである。斬つた一団の首領は、慶長と同じく伊弉敝家に連なる伊弉敝烏哭蛇^{うなへび}で、慶長はその後、数日を生きて当日の一切を偽りなく語つて記録させ、かつを封印させた。かくして詳細がいまもかように残るのである。

なお、最初に斬られた真^ま欣^き屋^や清兵衛は薪を売る家の倅であつたが、これも伊弉敝家の血に繋がる辺者であつた。

旧事記とは、『檜樞志料』のことである。阿曾暝神社の禰宜、山盛弊伊南いなが古来の口承口伝を文にした卷子本で、その中に『瑜伽師地論百卷承継證文』に触れた一節があり、併せてその全文が添えられている。この證文は比叡山で修業した天台宗の僧侶、霧蕭が『瑜伽師地論』百卷を承継した由縁を綴った記録である。

霧蕭は当時、密教僧として学びながらも、忽然と曹洞宗に強く感化され、寺を出でて比叡の鬱蒼たる怖ろしき山に籠り、坐禅三昧をしていた。伝承によれば、東北の地へ赴かんとするも突然の病に斃れ、果たせず急逝している。

證文の内容をかいつまみ、ここに録す。

霧蕭はその夜も臥すことなく、山中に坐禪を組んでいた。真つ暗な山の巨魁全体はその夜も彼を睨むかのように威圧する。その怪偉は底知れなく、大靈威が存在するかのようで、真砂なす天穹は原因のわからない大唸りをごおっと過らせ、木々ざわざわと山吼えるがごとく、岩なども眼も口も鼻もない巨人のようであつた。彼は托鉢し、布施を受け、復た山に還り、深般若波羅蜜多の行を行じた。そこに天狗があらわれ、のたも宣うた。

「我は天智天皇元年壬戌（みずのえいぬ）の時に世にありし修験者な

り。うつしよに未練なくも、かくも長く、こなる處に留まるは、ただあはれなる魂の鎮魂慰霊がためなり。いみじく感じ入れば去り難く、これも又拙僧が運命にしありとも思ふるかな」

「乞ふ。その所以を語りたまへ」

「乞はれずとも。」

何とならば、汝にもその縁（えにし）大いにあればなり。この縁あるがゆえ、汝と我と此處に見（まみ）えん。多生の縁とこそ知れ」

「縁とは」

「貴僧は俗名を伊釵ながあめしゅうげつ敝霖秋月とふ」

「さやう。何ゆえ存じおるや」

「我は、俗名を安蘇生井いくな為久那といふ。龍りうたいせん大山と号し、この比叡みの御

やま山に崇福寺大伽藍の建立されし頃より、山に籠れる修験者なり。

夢を見し。惨死せる血まみれにて物の怪の姿なるも双眸の美しき怨

霊あらはる」

「奇怪な」

「彼、自らの名を「いあいな」と曰いひ、我に向かひて「縁ゆえにこれを伝へよ」といふ」

「これといふは」

と問へば、

「この『瑜伽師地論』なり。天竺伝来のこれを汝に任す。これを蝦夷^{えびす}戎の地に伝へよ」

「これは異なり。何ゆえ彼の地に」

「由縁はこれより説ひて聞かす。」

あゝ、今日まで背負ふも、はや身も魂もこの魂魄の強きに堪へ難し。修験が嵩じて遂に遷化し、山の神の眷属たる者に列する身とも変ずれば更なり。

問ふまでもなく、顕教の物を扱ふは顕教の者が相応しき。山棲みの

身には厳し。貴僧こそ相応しけれ」

「貴殿の伝へんとする御旨、心得たり。されば由縁を説きたまへ」

「さもありなん。さてさて説ひて聞かさうぞ」

天狗の説くは遠く天竺に始まり天智天皇の御代にまで及ぶ物語であつた。

檜ひかが風土記によれば、

「天命開別天皇（アメミコトヒラカスワケノミコト）の御世、斐い西あ伊い

那なといふをとこあり。崇福寺に仏を礼（ゐやま）ひ、仏道を崇（かた）て重（あが）め奉獻（たてまつ）るも、安蘇生井家の娘、袁毘良おひらを情ひ染めて道の外なると云ふ。追ひ難（やら）はれ、流離（さすら）へぬ。故（かれ）、時の人、あはれみて曰はく、非塵清（いさきよ）き厭離ならずも人の身に あらば意（こころ）し欲（おも）ほゆ あはれ」

斐西伊那いあいなが袁毘良おひらに感じた感情は尋常なものではなかった。彼は捨て子であつたのを伊釵敝家の侍女に拾われ、哀れんだ同家の火呂日酒磨女（ひろひこまろの娘）が屋敷で育てるよう命じた。斐西伊那は7

つの歳に崇福寺にあずけられ、住み務めていずれ得度しても良からうと住職に見込まれるまでに至る。将来を嘱望された秀才であつた。その頃からか、実は斐而伊那は女の実子で、それを隠すため、わざと一度捨てたのではという噂が流れた。斐而伊那の父はその噂では安蘇生井真菅乃ますげのではと囁かれる。

すると斐而伊那の袁毘良への愛は近親愛であつたのか。さばかりは誰が人心の奥の秘懐を知らんや。

さて、天命開別天皇とは天智天皇であるが、斐而伊那が務めを奉じた崇福寺は天皇の勅願に拠り建てられた寺で、いまは礎石を遺すのみ

となったが、かつては大伽藍や仏塔、講堂や金堂があり、平安の世までは時につれ、栄えて続けていた。

寺の由緒は大津京の遷都が行われた年の翌年、天智7（668）年、当時王都であった近江大津宮の乾（北西）の方角の守護として勅願による創建である。歳月とともに篤く信仰され、平安時代には東大寺、興福寺などとならび、十大寺の一つに数えられる大伽藍となった。されど鎌倉に征夷大將軍が幕府を置きたる世以降、衰退しやがて荒廃し、いまに見るよう北尾根に弥勒堂、中尾根に小金堂や塔跡、南尾根に金堂や講堂の跡が残るだけの荒まじきさまに相変わり成り果てた。

いま比叡山の東麓、京阪電鉄石坂線の穴太駅あのうを降りると、穴太積の石垣が見事な盛安寺がある。祀られた十一面観音像は元来、山奥にかつてあつた崇福寺に祀られていたものである。

建物跡の基礎石しか残っていないその寺は長い間忘れ去られていたが、昭和14年、塔跡から舍利容器（国宝）が発見され、報道され、世に再発見された。舍利容器は現在、近江神宮に保管される。

ちなみに中尾根を下ると、小さな滝があり、左に洞窟がある。金仙滝と霊窟だ。

そここそが建立の由縁となつた場所であると言う。伝承によれば、

天智天皇が宮の乾（北西）の方向に靈窟があるという夢を見て、翌朝、そこへ行ってみると、一人の僧侶と出会い、ここがかつて仙人の住む靈窟であつたと聞く。これが建立の契機であつたとか。

二〇一四年、靈窟で土の壺に入つた石の筒が見つかり、石の筒には布に墨で記された『瑜伽師地論』が発見された。布には最後に「鬱寥より拝領す經典により寫せり」と錄され、僧じようがん淨願と記名してあつた。

淨願はそもそも伊釵敝家の者であつた。なぜか聖典をこの窟に隠し（彼が靈窟に隠した証拠はない。ただ、記名がある以上、彼の持ち物だと推測されるので、状況から推察して彼がここに隠したと思え

ないだけだ）この山で賊刃に斃れている。

袁毘良の母親は蝦夷の娘であつた。二人の兄を追つて身を隠しながら都に上つたところ捉えられ、紆余曲折を経て安蘇生井家の采女になり、その美しさゆえ当主中庸なかつねの寵愛を受けて孕み、生まれたのが袁毘良であつた。

袁毘良の美麗は言辞を絶している。見た者は皆惹かれずにはいられずとも、斐而伊那が情念は常ではなかつた。彼が彼女を初めて見たのは桜花の爛漫たる季節である。直向きに生きていた時間に突然、亀裂が差したのだ。

斐而伊那の日常は雑用に明け暮れ、どうにか勉強にも参加し、寝る間も惜しむ日々であつた。暗い時刻から井戸の水を汲み、竈に火を熾し、雑巾掛けをし、忙しく雑用をこなし、それらの後に僧らが集まる未明の読経を廊下に正座して聴いた。

苦痛に思うことはない。運命によつてこの道に入つたとは言え、真理への求道は彼の性分に合つていた。諸仏教の最奥義を欣求して嬉嬉とし、澆刺たる勇猛心を以て進んでいた。

朝の行が済むと、庭を掃き清める。山の桜華が散り始めていた。そのとき、従者を伴い、牛車が来るのが見えた。できたばかりの寺を見

に來る貴族も多かったので、斐西伊那は不思議に思わなかった……はずであつたが、なぜか強く関心が起こり、じつと見入ってしまった。余り露骨に見て咎められては恥ずかしいので、木の蔭に咄嗟に隠れた。既に心は罪を感じてしまつていたのである。

その時である。突如一陣の春風が御簾を翻し、車中の貴人の姿を刹那、垣間見させた。彼はなぜか自分がそれを見るであろうことを感じていた。たぶんそうなるだろうと知っていた。きっとその時そこで見るであろう人をもうすでに知つてゐるような氣がしてゐて、睿らかにこの映像を以て待ち望んでいた。

その夜、斐西伊那は懊悩した。深夜、人目を忍んで金堂に入り、月光の差す仏像の前で苦悶した。

「あゝ、あの方を見てしまったてはどうして求めずにいられようか。あゝ、御仏の御教えを知ったときは、まさにこれこそが我が魂が激しく求め欲していたものと歓喜し、運命に感謝したものであつたが、あゝ、あのお方の双眸の炎のごとき碧き燦めきを見ては。虚し。

あれこそが五色の雲にも勝るこの世の究竟の真理、神のごとき焰のごとき日照の永遠の真義、ありとしあらゆるものの究極原理、最も輝かしく眩く美しい正義。

あゝ、どうして求欲せずにいられようか。まるで神の松明で点火されて迸る彗星のごとく、身を薪にして燃やしながら疾走するのみ。どうかお赦してください。苦しくて堪らないのです。この一刹那さえもが永遠のように苦しい、あゝ、余りに永い。一層死んでしまいたい」

彼は出奔した。愛著を断滅しようと山岳修験者に交じって苦行した。その荒行は常軌を逸す。氷を割って灌壺に入り、嚴寒の灌に数日も打たれ続け、あわや死せんとする時もあつた。それでも情根を断つには至らない。身を裂く苦行によって、慕情を滅すか、或いは死に迫らんとする魂魄の必死の力を以て現世の法則をも叛き裂きて叶わぬはず

も想いを叶えるか、いずれかに迫らんと欲していた。一日穀一粒の行を行じて、根を断つに至るはずがない。

「もはや死なん」

そう思い、涸渴し餓えて凍えた体を山岳の洞窟に横たえる時、猛然と烈しき情念濛々と湧き、もはや自らの意識に非ず、餓死寸前衰弱の身にあるというに怪力を以て天狗のごとく軽々山を下り、里に現われて屋敷の前の常緑の大樹の高く太き枝に止まる。そのさま、あたかも悪鬼羅刹のごとし。彼は見た。塀越しに、庭越しに、畳の上に坐す袁毘良を。

その双眸は碧いわけでもないのに霧に翳^{かす}む湖のごとく青雲のごとく遙けき海のごとく青みを帯び、ブリリアントな燦めきを見せる虹彩という、瞳孔の開きを調整する筋肉の一種には太陽の青い光線が吸収されぬまま亂反射するのか、眸に放射状の縞目の文様を做り、カットされたダイヤモンドのように美しい。青蒼碧藍紺紫サファイア群青コバルトブルー水色土耳其古石ラピスラズリの一粒子一粒が鏤められた爛々たるモザイク。一つ一つが氷による太陽のようにコロナの炎を随えて瞭かに炸裂のごとく熾り燿く。光の潮が三千億兆光年の全平行宇宙世界に大氾濫し、炯らかに睿らかにあふれる亂反射、強烈燦裂たる

光燦の八絃放射状の光がすべて何もかもありとしあらゆる一切の現実存在の意義を齎す。 Presence だ。

虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹彩との間の前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる晰らかさでクリスタルガラスのよう透けてその透明度は湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒一つ一つが表面の凹凸の一々も精緻な解析度で明晰に目眩をさせるほどのきよ水をも超えるほどの明良かさ。

その双眸は碧ならざるも、その魂は煥り為す青碧。蒼燐が紺碧に燦々と爛めく。碧蒼なる燠火のごとくに炮烙し、奥にいくにつれ炳焉

かとなるその奥に、燠せる青蒼を赫奕と太陽のごとき燎らかさで爍かせる。光燦による薔薇窓だ。聖なる天のステンドグラス、無際限に広範囲なる光焰輪の紋。言葉にならぬ永劫に無限の真実。人間が一秒たりとても呼吸することのできない、高純度の鮮烈な空気、誰しもその虹彩の光輝の尖熾に射抜かれる。

この刹那に宇宙は生まれた。宇宙世界の森羅万象の全史が瞬時に流れた。素粒子の一つ一つの歴史までも数千億兆年に渉る全史が。すべての真実、一切の真理はいまこの瞬間、ここから生まれ、永遠にここに存在し、過去未来の一切がいまであった。時間性は見掛けに過ぎな

い。遷移は同一性である。過去はこの一刹那を構築する礎として存在させられようとしている。未来はこの一刹那を支えるために既に決定的に存在していた。数限りない聖者の教えも、ここから生まれる。御仏もこれがゆえに苦行され、解脱され、法を説いたのだ、と。この双眸を莊嚴するために真理というものが用意され、御仏を以て世に知らしめさせたのであろう、と。されば梵天と帝釈天の勧請もこれがために為されたに相違ない。そう言つて何の差し障りもないほどの真実性があの燦々の中には在る。実在する。

斐西伊那はさように知った。身が裂けるかのようにであつた。裂けて

天に衝き上げるかごとくであつた。あゝ、全身を以て、いかにして愛さずにいられようか。

意義というべきもののすべて、全意義がここに存在する。

「それに比していまの俺の何と浅ましい、醜いことか」

激しく身悶え、悔やんだ。

「とてもこの獣の姿を晒せない」

もとより彼女の前に立つ意思などなかった。

しかしそれなのに彼は飛び、庭に降りてありのままの姿を現わす。

「袁毘良さまっ！」

彼女は驚いて凝視した。

「あなたは」

袁毘良の眼差しに睿智の光が甦る。

「あなたは、いつぞや」

「そんな。わたしを覚えていようはずがない。見てもおられぬはずで
す」

「いいえ、そうではありません」

「では、どこでこのような下卑なる者を見たのでしょうか」

「崇福寺で」

「しかし、あり得ないことです。いえ、信じられません」

「なぜでしょう」

「私のような下賤の者がお目に留まるはずもなく、しかも私は」

「しかも、とは」

「私は物の陰からあなたさまを見ていました。短い時間でした。私には短くなくとも……」

「そうでした。でも風に簾がめくれた刹那」

「あゝ、そんな、いや、嘘だ、信じられない」

「わたくしは、強い光を感じました。木陰からさやかに燦めく蒼穹の

ような双眸があたかも清みたる湖が光を返すように、こちらを見ておりました」

「いや、しかし、嘘だ。たとえそうであつたとしても、あの頃といまとは、私の姿は余りに異ざま、余りに違い過ぎている。親であつてもこの獣、妖怪魑魅魍魎が我が子であろうなどとはわかるまい」

「双眸の光はそのままです。親兄弟でわからなくとも、縁で結ばれておれば、わかる時もあるのです」

「何という嬉しいお言葉……あなたさまと縁で結ばれておるとしたら、どれほど幸せでしようか」

「そうとしか思えません。最初から逢ったことのあるような、昔からの知り合いであつたかのような、懐かしい気持ち、いいえ、それでは到底、説明できない、深い念い……」

「あゝ、同じです、同じです。何と幸せな事でしょうか。あゝ、信じ難い。このような幸福があつて堪るものか。多くの人々が苦しんでいるというのに。」

それしても奇跡のようです。まさかこの言い知れぬ感情を共有できる方がこの世にいうとは、それがまさかあなたさまであらうとは、あゝ、まるで千年の孤独から救われたかのような思いです」

「千年……あなたは喩えておっしゃいました。しかしわたくしは、まことさように思います」

「さようとは」

「千年です。あなたとわたくしとは千年、いや数千年からの契りがあつたのでは、と。いいえ、もしかしたら、数万、数十万星霜もの情けが」

「さようなお言葉、余りに壮大莊嚴過ぎてまるで聖典の御仏の言葉のようです。あなたさまはやはり只人ならぬ神さまの生まれ変わり、宇宙森羅万象の一切及びその現在過去未来がいまこの一刹那に由来し

て生まれ氾濫したかのような」

「喩えでなく、まさしくさよう観ずる。この縁のために仏も縁を説きたまうかと。この一刹那のため過去は在り、この一刹那の証のために永劫未来が存すかと」

「あ、人が来ます」

「人が何でしょうか」

「しかしあなたさまが不幸せになられてしまいます」

「さような地上の価値などいかようなものであろうぞ」

「今宵はこれまでにし、復た明晩来ます。あゝ、明日の夜までが何と

長く感じられることか。あたかも永遠のように思われる。すわっ」

そういう掛け声とともにひらりと跳び上がり、庭木から庭木へと飛び移つてを最後に塀を超え、山林に姿を消した。

弓矢の者たちが駈け寄る。

「袁毘良さま、何か心配がいたしましたか」

「ご無事の様子ですが、我ら獣の臭いを感じ」

「不吉な感覚が過りました」

袁毘良は眉を顰めた。

「もうよい。何事もない。苦勞であつた」

夜が明けると、斐西伊那は石を缺いて磨り、石の刃を作つて髭を剃り、髪を切つて整えた。勝手知つたる比叡の山に隠れていた。靈窟の瀧で沐浴し、髭を剃つていたのである。すると人の気配がして身を隠した。若い僧侶たちであつた。瀧の水を汲みに来たのであつた。通常は井戸水を生活に使うが、時折、何か特別なときに瀧の水を使うのである。

「しかし、なぜだろう」

「私にわかるわけがない」

「それは、そうだが」

斐而伊那は聞き耳を立てた。何か予感がしたのである。

「突然、安蘇生井のお姫さまが来られるなんて」

「中庸さまのむすめさまだそうだ」

「あのお美しい袁毘良さまさ」

「おい、我ら僧侶たる身。その言葉不謹慎ぞ」

「これは、これは」

斐而伊那はどぎまぎした。まさか夜を待てずに逢いに來るのでは……そう思えたからであつた。だが、そんなはずはない。二人は崇福寺で出会つたのだから、崇福寺に來ればまた会えると思えるのは、

状況が普通であれば、自然な考えである。しかし袁毘良は昨晚、斐而伊那の異形のさまを見ている。いまも寺の雑役をしているとはさすがに思わないだろう。とすれば、なぜ崇福寺に来るのか。

彼は崇福寺に近寄りたい衝動に駆られたが、敢えて靈窟の傍の木の上に隠れてじっとした。日が高く上り、昼というに静寂が深まり、鬱蒼たるも閑とし、突如眠気に襲われた彼は夢を見た。夢の中で山賊に惨殺された僧侶が彼に向かって血だらけでにんまりと笑う。怖気が起こり、眼が覚める。人の声がし始めていた。目が覚めたのはそのせいかもしれない。そう思うも一刹那、斐而伊那の胸に不安が過る。まさ

か、袁毘良さまがここに来るのでは？

まさにさようであつた。やつて来るのは、牛車と従者と警護の武者もののふである。車に乗るは袁毘良であつた。いまはもう、簾が偶然にめくられなくとも彼にはわかつた。

「なぜ」

しかし心は狂おしく歓喜に溢れた。

突如世界が桜花爛漫になった。彼は隠れていた場所から降りて姿を現わす。従者が驚き叫んだ。

「あれな、バケモノ！」

「何だ、あれは！」

「おお、物の怪ぞ！」

もののふが剣を抜いた。弓を引いた。だが斐西伊那はたちまち殺戮し尽くす。

袁毘良が簾を上げた。

「斐西伊那！」

「あゝ、袁毘良さま！」

飛び降りる袁毘良を受け止めて強く抱き締める。これが初めての触れ合いだった。貪り合うような二人の激しい情念は抑止不能であつた。

止まらなかった。だが神々しく双眸を燦めかせて袁毘良は言った。

「あそこに」

「あの靈窟ですか」

「そうよ、あそこにわれらの魂が」

斐而伊那は何のことか理解できなかったが、袁毘良の双眸の燦めきによる天啓を受け、なぜかそれを知っているような気がした。寧ろ彼女自身が自分が何を言っているのか知らないのではないか、と思えるほどに。靈窟に半身を入れた。土や石をどけると、土を焼いて作った壺が出て来る。

「これは」

「さ、斐両伊那、そのふたを」

開ける。

四角い筒型の石の筒が現われた。

「こんなものは見たことがない」

筒を開ける。

巻物が現われた。紐を解いて開く。斐両伊那は驚愕する。

「見たこともない、けれども、間違いなく仏典だ」

「さあ、これを蝦夷に持ち帰りましょう。これが蝦夷の地の力になり

ます。さあ、わたしとともに逝きましよう。疾く遁れよ」

「わかりました」

しかしそのときである。関の声がする。斐西伊那は急いで筒を壺にしまつて、元のとおり石で覆い隠し、洞窟を出た。たちまち百本の矢で射られ、絶命する。袁毘良は捉えられ、叛逆の罪で後に斬首され、東北の国境に晒された。將軍は声高くのたま宣う。

「怨霊となつて国境を越えようとする蛮族を呪詛せよ」

喪令もれいと両矜あれいは激しい勢いで山の斜面を駈け上がっていた。猪を追うときにもこんなに速く奔ったことはない。息は切れ切れで、心臓が破裂しそうだった。休むわけにはいかない。一つの重い荷物を背負っていたが、時々交替した。

追手は迫っている。

鎧を着た大和の兵だ。蝦夷の子であることがばれてしまったのだ。なぜ知られたのであろうか。同じく隋から帰つて来た浄願じようがんという僧が訴えたからである。しかし彼らはそんな由よしは知らない。

いったい、何ゆえ浄願は二人の素性を知っていたか。

「馬があれば」

誰にも追いつかれないのに……喪令はそう考えて歯噛みする。だが、ないものを想っても虚しい。両手がついに叫んだ。

「これを隠そう、これだけは。これだけは、大和の手に渡らせたくない、これをどこかへ。俺たちはもうだめだ」

「あああつ、くやしい、くやしい、でもそれしかない」

小さな瀧、脇に小さな洞窟が。喪令と両手の目が合う。「あそこか」

「そうだ、そこにしよう」「霊威を込めて人目から隠す」「念じよう」

仏陀の御加護がありますよう」

二人を追うのは膂力自慢の山盛弊やもりべもろなまろ諸奈磨。蝦夷のスパイと思われる

若者を捉えて手柄にしようというわけだ。そしてその後ろには、淨願もいる。都で吉報を待つことなどでできず、復讐の悦びに歓喜紅潮して、山盛弊に追隨している。駈け上がる彼らが来てみると少し開けている場所だった。少なくともそう感じられた。やや明るいだけであつたかもしれない。追つていた二人の少年は小さな段差のある流れ、細い灌の傍に立っていた。仁王のような形相で、青銅の劍を持って。劍には炎が燃えるように見えた。

「射て」

兵士が矢筒から矢を抜いて弓を引く。

「うらあつ」

怖れもなく叫びつつ蝦夷人二人は抜剣し、まっしぐら突進してくる。数本の矢を払うも虚し、のけぞって斃れる。斃れて蒼穹を仰ぐ。草が耳を塞ぐ。鳥の声が遠くで聞えた。意識が朦朧とする。あゝ、死ぬんだ。そう思った。心で『喪令！』と叫んでも返事はない。彼もまだ死んではいけないかもしれない。わからない。もう繋がりは断たれてしまった。ここから先は独りだ。どんな経験をしても誰とも共感できないし、どんなことをしても誰にも知ってはもらえない。怖ろしい。恐い。

誰か助けて。こんなことになるのであつたなら村を出るのではなかった。わかつていた。わかつていたが、平氣だと思つていた。でも全然違う。生きている時の考えとは全然違う。生きているときは人を氣にして自分をを誤魔化し、意地を張つていたのだ。あゝ、どうしてま氣が附くのか。どうせいま氣が附くくらいならば知らぬまま死にたかつた。どうして人間は、どうして………

両羚が息絶える。涙が頬を伝わり、止まつた。

翌日、淨願は改めて独りで瀧の傍の洞の前に戻つた。彼だけは喪令と両羚がそれを持っていたのを知つていたので、隠すとすれば、状況

から推察してそこが一番相応しいと思って舞い戻ったのだ。

案の定、土の壺があり、壺の中に四角い筒のような石の筒があった。聖典百卷、紛れもなくその中にある。一つ一つ確認し、恍惚と見入った。

そして墨を瀧の水で墨を磨る。漢の時代に作られた墨丸という球形の古墨を使っていた。最終巻の巻末に「鬱寥より拝領す經典により寫せり」と録す。再び洞窟に隠し、時機を見て人夫とともに山から降りそうと考えていた。喪令や西羚のような壮健な若者ならともかく、彼には到底、運べそうもなかったからである。

「見つかる心配はない。御仏のご加護がある」

しかしそれは叶わなかった。

下山中に賊に襲われ、刃に斃れたからである。賊は僧が来るのを知っていた。左右の耳から繰り返し、そのように唆す声が聞えていた。あたかも二人の人間が彼の耳に囁くかのように。

鬱寥^{うつりよう}はインド人で元の名を波闍波提（ハジャバテイー）といったが、

中国に渉るにあたってその名を革めた。当時、中国は国名を隋と号し

ていた。

父親はカシミール生まれのインドの名門貴族出身で、ナーランダー僧院に学んだ碩学であったが、仏教普及の志篤く、ヒンドウ・クシュ山脈を越えて、バーミヤーン、サマルカンドなどを經由してシルクロードに乗り、西域きじこく亀茲国に入った。母親は亀茲国王家の血筋の者で、やはり仏教信仰に篤い人である。出国にあたって還俗していた父は母の婿となり、鬱寥は西暦四六〇年に亀茲国に生まれた。一三歳で仏門に入って原始經典や阿毘達磨仏教を学び、仏教の盛んな隣国、高昌国の王に招かれて講義しつつも研鑽し、さらに東にある遊牧騎馬民族の

鮮卑の国、北魏で孝文帝の下、龍門石窟の巨大石仏の造営が始まると大いに共感し、平城から遷都して三年を経た洛陽に移り住む。四九六年のことであつた。

彼は母から継いだ秘蔵經典を持っていた。それはいわゆる阿毘達磨（アビダンマ）というもので、仏教教説の解釈・注釈などで、仏陀の説ではなく、後世の人間が著した論書である。生前、母はこう言っていた、

「これは龍樹菩薩（ナーガールジュナ…2世紀インドのデカン高原クリシュナ川流域のナーガルジュナコンダの人と謂われる）の記したも

のです。尊い教えです。あなたは私の死後も終生これを大事にし、死に瀕しては信頼できる信仰厚く学識深い僧に譲りなさい。いいですか、忘れず、必ずや母の言葉を守のです」

しかし母が譲渡したものは正確には世親（ヴァスバンドウ）の兄である無着（アサンガ）が兜率天に住する弥勒菩薩の説を聞いて著したといわれている『瑜伽師地論』であった。彼は最初に見たときからそれを知っていたが、終に言わなかったのである。

北魏で彼は訳経僧としてサンスクリット仏典を漢訳し（孝文帝は漢化政策を推進していた）、仏教普及に貢献した。晩年、彼は九〇を超

える齡で普及の念に駆られ、隋に涉った。『三国志』の「魏書」第三

○卷烏丸鮮卑東夷伝倭人条を読み、倭国を知ったため、

「あゝ、海を涉つて仏の教えを広めたい。その地では未だ仏のことすら知られていないのではあるまいか」

そう想うと居ても立つてもおられず、少しでも近附かんと移り住んだのである。まだ遣隋使の派遣される五〇年も前であつたため、倭人に逢うには海の附近へ行かなければならなかつた。遼東半島の登州の寺に属する房に寄宿し、質素に暮らした。数少ない訳経僧として礼を尽くされ、厚遇された時代とは比較にならぬ貧しい暮らしであつたが、

僧らの間では崇敬され、心は充たされ、又希望に燃ゆる日々でもあったが、老いは厳しく、海を渉ることなど叶はずもなく、鬱たる想いに沈む日もあった。

そんな或る日、従者の牽く二輪の車に乗り、港に来て渺茫たる海を眺めていると、見慣れぬ船が着いた。

「おお、あれはもしや」

「ええ、倭人の船でございます」

「いったい、どのような人たちが乗るのか」

「さあ。」

様々な者らがありましようが、いずれにせよ、野蛮な種族です。貴人と言ったって、此方の村の長にも及びません」

「さようなことはあるまい。言葉や習慣が異なると愚かに見えるもの」「いいえ、あの着物をごらんさない。一枚布に穴を開けて頭からかぶった貫頭衣を腰紐で縛っただけです」

「それを絹で作って華美に飾って、刺繍を縫い、附属の布切れを纏い着けて、さらに金銀玉石の宝飾からなる様々な装身具で飾れば、中華の服になる。ただそれだけのことだ」

「そんなもんですかねえ」

「あの者の双眸には蒼き知性の閃きが見える。あの者を呼びなさい」

「かしこまりました」

呼ばれたのは一人だったが、もう一人の若者も附いて来た。喪令と

両^あ鈴^{れい}という若い男だった。

「ご老人、何かご用でしょうか」

「君たちはまだ少年と言つてもおかしくない齡と見たが、年に似合わぬ^あ睿^きらかなる^あ炯^かき眼をお持ちだ。是非お願いしたい旨がある」

「何でしょう、ご老人。そういうあなたさまも常人には見えません。

霧深い岳の深き木々繁る奥に棲まう、聖なる尊き神仙のようです」

鬱寥は寺に招くと、『瑜伽師地論』を見せて自分の志を語った。

「わしはもう、倭国には涉れない。せめて我が魂魄であるこの聖典を倭国に涉らせ、聖なる天竺の神の教えを広めて欲しいのだ」

仏教を彼らにどう説明しても即時了解することは難しいと考え、敢えて天竺の神と言ったのだが、

「仏教ですね。」

実は僕らは仏教のことが知りたくて国の掟を破って出国し、大和の国を過ぎって海に出ると、盗賊の振りをして大和人の海賊船に乗り、二か月前、この海岸まで涉って来たのです。そして最近、賊の統領の

寝首を搔き切り、船を乗っ取ってから盗んだ財宝を資金にして船を隋の漁民のように改造して、この湾に難なく入港したのです。

しかしここでお逢いできるとは。あゝ、これも御仏の導きです。あゝ、奇蹟だ」

もう一人が説明する。

「我々の一族は倭国に来る前は遠い西の国にいました。数千年をかけて移住し、倭国に着いたのです。ですから西の情報はいくらか持っていましたし、又少しずつではありますが、西の情報が入って来ていました。仏教のことはずいぶん前から聞いていましたが、百済から公

式に仏像が伝来し、僕らの学究の情はもはや止め難い、堪えられないものになり、この冒険の旅に出たのです」

仏教は五三八年（又は五五二年）に公式に日本に伝来していた。

鬱鬱は二人の願いを聞き入れて得度し、喪令に求正、ぐしやう而か鈴いどに海度と

戒名を授く。一年かけて丈夫な布に聖典百卷を筆写させた。最初、鬱寥は原典を持って行くことを彼らに勧めたのだが、二人の倭人は自分らよりも適任な者がこの後に来るかもしれないからその時まで取って擱いてくださいと言い、敢えて日月をかけて筆写したのである。写す合間に二人は特性の石の筒を作った。彼らは東アジアでは見ない石

工の技術を持っていた。縦横七寸高さ三尺で蓋附きの四角い筒を造る。どうやって細工したものか、さほど壁は厚くなく、角は丸く、比較的軽量であった。その筒に写した百卷の『瑜伽師地論』を入れ、更にその石の筒を土の壺に入れ（壺の中には藁を詰める）、壺を補強するために縄を網状にしたもので蔽うように包み縛った。

その数日後、日本から来た僧淨願が鬱寥を訪ねた。

「もし仏典をお持ちでしたら、是非、布教の力とするために日の本に持ち帰りたいのです。師よ、曲げてこの願いを聞きたまえ」

「『瑜伽師地論』を持っています」

「師よ、どうか、それを」

しかし鬱寥は首を縦に振らなかった。

「先般、倭人の若者二人が聖典の写しを持って帰国いたしました。貴国にはもう涉っています」

「その者らは出家者ですか」

「在家者でしたが、拙僧が得度いたしました」

「さような者らに」

「忌憚なく申し上げよう。貴殿は功名心が為に經典を欲す。彼の若者らは真理への情熱のゆえ欣求す。我が心は倭国へ經典の渉るを欲すも

貴下に在るを善しとせず」

浄願は頬を赤黒く震わせて出て行つた。

鬱寥は五五七年に遷化する。没する夜、彼の脳裏に幻が走馬燈のごとく過る。それは言葉にするも躊躇われる凄惨な光景で、惨殺された幼い兄妹であり、彼自身はその妹の方であつた。

インド北西部、ネパールに近い地域に住むシャカ族は極めて尊大で、自尊の情が強かったと伝えられている。

紀元前5世紀、彼らは隣接する強大な大国コーサラに従属していたが、そのコーサラ国の王パセーナデイが彼の一族はヴェーダ聖典に出てくる日裔（太陽の子孫）^{スーリヤ}にして伝説の英雄イクシュヴァーク王（甘諸王）の後裔であると喧伝すると同様に、シャカ族も又イクシュヴァークの末裔であると名乗って憚らなかった。

その紀元前数千年の大昔、イクシュヴァーク王（甘諸王）にアクシヤ（唾久洒）という家臣がいた。地中海の出身者で、黄金の髪を持ち、アポロンの子孫を自称していた。なおこの時代、アポロン信仰はまだ小アジアにあったのである。さて彼は元々はインド大陸を渉る海商だ

ったが、偉大なる王の目に留まり、武勇にも優れた巨漢であつたことから、大臣として招聘された。

神のようなイクシュヴァーク王の招きを歆び、彼はすべてを捨てて臣下に下り、忠誠を尽くすことを誓う。

彼らの住む地域には湖が多かつた。（なお、シャカ族の領土にも湖が多かつたようだ）

アクシャは或る日、国の領土を検分しながら湖を見渡す場所に立つた。するとそこにいた一羽の白鳥が姿を変じて美しい女性にょしょうとなる。人間ではない。しかし彼は激しく魂を篡奪された。

「おゝ、何と言う、何と言うことか、美しい、余りにも美しい……イシュタルさえも、かようなまでに美しいであろうか。否々、ゆめゆめさようなことはござらぬ」

女性はアプサラスのヴァシーであつた。アプサラスは半神で、水の精、海の精と呼ばれ、能く白鳥に姿を変えることで知られる。いかなるものも魅了して已まぬ美しさ、しかし人は美しさに惹かれるのである。人は運命に牽かれる。

アクシャが感じたのも、運命のような深い感情であつた。懐かしさ、しかしそれだけでは説明できない、切なく、とても強い感情であつた。

「あゝ、私はあなたの虜となつてしまつた。この強き愛の念は私を神をも凌駕するほど強く高みへと昇らせる。この昂り、この崇高な感情、あゝ、これを味わつた者たちはどれほど舌が縛れたであろうか」

かくして彼はヴァシーに対する激しき愛を抱き、強くインドラ神に炎のように強く祈祷し、祭火に生贄を大いに焼いてソーマ酒を捧げ、強く懇願した。激しく哀願した。願いは雷霆神に届く。

「偏愛する人間よ、よろしい。所詮、人はさような生き方の他にはなせないのだから。その猛々しき金剛杵のごとき念いは天を衝いた。さような愛は、所詮は儚い夢幻に過ぎないのだが。仕方あるまい。それ

を言つては人間は生きて行くことなどできないのだから。言つても仕方ないのだ。

我ら神々は戯れに愛するのみ。強き種族とはさようなり」

かくしてアクシヤはめでたくヴァシーを妻とする。彼の觀喜たるや
廣大無辺、世界を無際限に燦々と焔かに焼かせて空前絶後、すべて存
在を睿らめ、その精緻精密は寧ろ凄絶を究めて龍と化し、仏に逢うて
は仏を殺し、親に逢うては親を殺さんばかりの勢い。有頂天、絶頂と
はまさにこれに他ならないであろう。あゝ、古来、人の営みの極みと
は子孫を遺す営みに他ならない。しかし天界では反対する神々やその

眷属たちが数多あつた。

まぐわ

「そのようなことは赦されぬ。不死なる者が死すべき人間と婚うなど禁忌であり、神聖冒瀆であり、天地理の秩序の破壊であるぞ」

ただしヴァシーは人間の妻になるにあたってこのように欣求した。「ならば死すべき身としてください。不死なるこの身を、人間と同じように、死すべきものとしてください。まさに望み願うところです。」

愛とは、過去に失われた自分の半身を探し求めることです。私はアクシヤに逢ったときに言葉にならぬ情感を抱きました。それはとても懐かしい、切ない、深く、数千年の時を経て甦ったかのように、とて

も言い表せない感情でした。

愛とは求め合うことです。互いに求め合い、合一して初めて完全なる一つの存在となるのです。

愛する夫が死して、どうして生きていけるでしょうか。死こそが望みのすべてです」

不死を奪われ、死を肯ずる。

やがて愛の実り、子に恵まれる。兄を阿杵伽^{あそか}、弟を両史多^{あした}と名附けた。

しかしアクシャは二人の愛を憎む半神半獣のガンダルヴァの罠に

より、破壊と殺戮の大暗黒女神、カーリーに恋してしまうのであった。それはいつになく深き森へ狩りの馬を進めた日である。早朝に屋敷の門を出たが、獲物はなく、日は高くなり始めていた。

従者カンターカが言った。

「ご主人さま、今日は不吉な予感がいたします。もはやこれまでとし、お屋敷へ引き返しましょう」

しかしアクシャはその日に限って強情に言い張った。

「いや。まだ時間はある。進もうぞ」

すると鬱蒼たる黒き森の繁みよりカーリー女神が現われた。黒き者

という名に相応しく、からだはすべて黒光りするほど真っ黒で、黒光りすると言っても硬質ではなく、マット (mat) な、星のない宇宙のような深淵なブラックホールの黒で、爛々と燃え耀く眼が3つあり、腕は4本、牙を剥いた裂け口から長い舌を垂らす。じやらじやら鳴る首飾りは髑髏を繋いで作ったもの、腰を蔽うのは切り刻んでもぎ取った手や足だ。憤怒の形相で血を呑むことを好み、殺戮に陶醉し、戦いに勝つと歓喜して叫び、狂ったように踊って大地を揺らし、粉碎する。

女神ドウルガーがアスラの兄弟（兄シウムバ、弟ニシウムバ）が率いる軍と戦ったとき、怒りによって黒く染まった女神の額から現われ、

アスラを殺戮したという。

「ああ、ご主人さま、恐ろしいや、おお、何ということでしょう、カ
ーリーです、大変です。早くお逃げになってください、馬を駆って！」
従者は恐怖で悶絶しました。

アクションは逃げなかった。彼に勇気があったたためではない。恍惚と
していた。

「おお、何と言うべきか、凄い、何という神々しさか。もしこれが人
間だったならただの狂人、殺人鬼に過ぎない。しかし風雷暑炎や波浪
は人を殺すも殺人者とは言われない。寧ろ天空や山嶽や大海は崇めら

れている。神もまたしかり。これほど凄惨でありながら、何と崇高であることか。人がけして達することのない崇高さだ。残忍で虐戮でありながら、おお、何という神厳さ、幽妙なる深玄さか。何と美しく、聖の聖なる存在であることか」

そう呟きながら死を怖れずに女神の前に立ち、あたかも虎に近附く兎のように引き裂かれ、終に絶命する。

ヴァシーは悲嘆した。愛する者を喪った悲しみであつたが、ガンダルヴァから事情を聞くと、またさらに辛い、憤りを伴う哀しみとなつた。しかしさりとて天界に帰ることをよしとせず、己の運命を捨て

てただ我が子なる阿杵伽と而史多に神なる永遠の命をとインドラ神に望む。

「宜しい。

余は事情あつて、汝ら一族を寵愛することとしたのだ。だが、いかなる理路整然たる理窟はない。神は人間のように地を這つて生きる湿性の者ではない。正しき論理など翼のない者の僻事に過ぎぬ。

汝の子息は神なる人となるであらう。もしそうなら萎えればスーリヤ（太陽神）の馬車を再び打ち砕く」

そう言つて贅沢なお世辞でも言つたかのように欣然と微笑した。

かくして阿杵伽と西史多は神人となり、光り輝く自在なからだを授かつて自由に贅を味わい、戦いを楽しみ、旅に過ごして生きるが、数千年を経て、西史多は仏陀と出会い、西史多は母が人間になった意味を知る。

兄阿杵伽はこれを驚き、かつ蔑みて笑う。

「何ゆえに苦しみの道を択ぶのか。滅びの道は厭うべき哉。厭うべきは避けるべき哉。滅びを避けるならば滅ばぬよう永劫にして不生不滅なる、最高の天に生まれればよいではないか。それこそが求むべき究竟。何ゆえ苦を択ぶか」

強く猛く赫奕たる兄はそう言った。

弟は応えて言う。

「強く栄える者、力ある者、神なる者たちはそれで良いでしょう。その願いは叶うから。しかし弱き者たちはどうしたらよいでしょう」

「弱きは滅ぶ。同情など地を這う湿性の者の論理」

「弱き者とは何者でしょうか。」

死を怖れる者を弱きと言うならば、滅びを避ける者はすべて弱き者でしょう。兄よ、あなたは知っていますか、僕が仏陀と初めて会ったときを」

「ふ。知るよしもない。知る意味もない。知りたいとも思わぬ」

「彼は死の瀬戸際にいました。」

老衰し、干乾び、弱々しい老人でした」

「愚かな、それが崇拜にあたうか」

「死を怖れて不死なる者どもよりは余程かと」

「神を恐れぬ冒瀆の言葉」

「真実はただ真実、事実はまだ事実です。それこそが法、神の掟、真の神の掟です。真実を言って神罰に当たるなら死んで幸せです」

「知らぬわ、貴様のような奴、どこへでも好きに逝くがよいわ」

「御心のままに」

西史多は去った。

叢林に炎のごとく坐す。彼のタパスは熾え盛っている。

甚深なる般若波羅蜜行を行ぜしとき、独りのアプサラスが空中から紡がれ現われた。彼女は言った。

「永遠の命を持ちながらも人間じんかんに生まれ変わらんと欲する者たちがいる。

おまえがそうであるように。わたくしもかつてそうであった。

ただし不死なる者が人間に生まれ変わるなら不死の魂は二つに分

かれる。わたくしは死への畏怖を超越するために、仏陀に逢うために、アクシャとヴァシーに生まれ変わった。そしてその魂はおまえに継がれた。だからおまえは仏陀に逢いたいと涸渴した者が水を求めるように欣求したのだ。

わたくしは、おまえよりもさらに数千年前に生きていた。過去にしながら仏陀のことを知り、仏陀に逢うために、転生してこの時代に来た。

そして先般、おまえが仏陀に逢ったとき、わたくしも仏陀とお逢いした。あゝ、漸く念願が叶い、生死の河を涉った。

そして初めて知った。彼が生きる世界を創るために宇宙が時間を遡って生まれたのだ、と。わたくしはその一連の大縁起の末端の一つであつた、と。

願いが叶い、大いに涅槃の境地、微妙なる解脱の歓樂をわたくしは得ました。おまえが死を超越したとき、わたくしも死を超えました。為すべきことはもはや為された。おまえもまた生存に戻ることはない。しかしながら、どうでしょう、おまえは、いったい、人間に生まれ変わることを望みますか」

「望みます。求願いたします。我が魂の高祖よ」

「然り。さらばさにあらん」

西史多は転生し、宇多哉うだやと栖蛇亜咤すじゃあたという兄妹となった。父を亡くし、母を支えて生きていた。クシャトリアが母を妾に所望した。若き母親は連れ去られ、弱く儚く小さい幼児だけが残った。夜になると、母に逢いたいと泣いて訴える妹を連れ、兄は屋敷に忍び込む。しかし二人は見つかり、母の嘆願にもかかわらず、肉欲と占有欲の虜となったクシャトリアの常軌を逸した情念によって母の目前で斬殺された。彼女は悲嘆と絶望と憤怒とで狂裂し、正気を失って死んだ。

兄妹が兜率天に昇ると、老僧が莊子とともにあらわれ、賞讃した。

老僧は言った。

「あなたたちは生けとし生けるものの中で最高の、諸々の天をさえも超える存在として、輪廻転生を超え、もはや生まれ変わることはない、真の涅槃に達した存在として、無余依の涅槃なる者になることもできません。

あなたたちは真実を追う魂を継ぐ者たち、そして終に永遠の真実、永劫なる真理、永久に不滅の現実に達しました。仏陀はこのために生まれたと言ってもよいでしょう。私はあなたたちにあなたたちの縁起を説いて聞かせましょう」

縁起を説いた。それに就いては後述しよう。ともかくも感じ入った兄は深く頭を垂れて言った。

「素晴らしき縁えにしをありがとうございます。僕たちは幸せでした。ただ」「どうしましたか」

「ただ心配は母のことです」

「さように想うてはなりません」

「なぜでしょう」

妹は問うた。

「すべては縁であり、結ばれた現象であり、生存が駆り立てるために

妄りに想いを架空した仮初めの価値観、傀儡、架空、絡繰りなのですから」

それは言葉ではなく、想によって以心伝心された。

妹は覚悟する。

「わかりました。では、輪廻転生を超越せず、再び世に生まれ変わって文字を習い、御仏の教えを知らしめる者になりたいです」

「時代はそれを求めています。それゆえに過去は在るのです。在るものの一切は過去になるのです」

莊子が飄々と言った。しかも厳かであつた。

「あなたたちは真人です」

古代漢字・漢文の碩学、故小川静教授によれば、『眞』という字は横変死した人の象形であるという。教授はそこに莊子の真人思想を読み取った。世俗の価値観で考える善・幸福から最も離れたさまが眞の眞である、という思想であろうか。とすれば、莊子が兄妹に言った言葉は理窟が合うというわけだ。

さて、アプサラスが宇多哉と栖蛇亜咤に聞かせた話とは次のとおり

である。

ガンダヴァテイー（芳香の女）とヨージャナーガンダー（由旬も離れた場所からも馨る芳香。由旬とは古代インドの長さの単位で、一般的に約11・3 kmから14・5 kmの前後という）というアプサラスの双子の姉妹がいた。薔薇のような双眸に、蓮華のような眉、百合のような唇に、桃のような頬、二人はともに馨かぐわしく匂うがごとく麗しく、ヴァルナ神やミトラ神が惹かれ魅せられた有名なアプサラス、ウルヴァシーにも匹敵する強い香薫を燦然と放っていた。

しかしその性質は大きく異なっている。姉は死すべき人間を喰い、

妹は不死に依拠する半神の種族を哀しんだ。死すべき運命にある人類を蔑み嗤うのは死を怖れるからこそである、と。

ガンダヴァティーは誇り高く、供物を祭壇に捧げる人間を睥睨していた。

「香り高き雄々しく若き羊の肉が祭火で焼かれ、その香りが天に達して神々に力を與える。それはパヴィトラ（羊毛の水濾）に濾されて醸される馨しいきソーマ酒とともに我らが前に捧げられた。

供物を捧げながら、「汝ら神々は常に祝福もて我らを護れ」（ヴァシシュタ家の祈祷のリフレイン）と祈る祭祀者どもよ、あゝ、跪く人

間たち、彼らは何と哀れな存在だろう。かくして光輝なる我らが神の一族に奉獻するこそせめてもの幸福であろう。高貴な者たちの役に立てるのだから」

ソーマとはソーマという名の植物の茎を石で圧搾し、羊毛の篩（パヴィトラ…羊毛の水濾）で濾し、木槽に入れて水と牛乳を入れ、発酵させたものである。ソーマ酒とも呼ばれるが幻覚作用を伴うものと解されている。祭火に注いで、神々に捧げるといふ。

さて傍らで憂鬱なおもてを見せる妹に言う、

「ヨージャーナーガンダーよ、美しき妹よ、暁紅の女神ウシヤスも羨む

がごときその輝かしくも若々しき、命漲るそなたが何ゆえにかくも憂いのさまを見せるものぞ」

「お姉さま、わたくしはあなたのように考えられません。不死なるわたくしたちは偉大なのでしょうか。不死なる者が不死を誇り、儚き命の小さく弱きを嗤うのは、寧ろ死への懼れの表われではないのでしょうか。

優越によつて心に安心を得ようとする生存の心機に異ならず。喩え不死であつても死を超えてはおりません。神でさえ死の懼れから遁れられてはおらぬのです。

不死ではあつても、死に怯えていては、到底、死を超えてもおらず、死への懼れからも遁れてはおりません」

「愚かな。」

さような思いをしてはならぬ。睿智ある者はさような下層の者に有り勝ちな、鬱々たる湿り気を帯びた、くさくさと滅入るような思慮をせぬものだ。高貴なる者は強く輝かしく明朗にあるものだ。単純明快明晰にして大いなるものぞ。偉大なるものは静かなる慎ましき鳩の歩みと、多くを聞かぬ小さき耳を持つものだ。強き種族はさようあるべき。そなたの言うようは惰弱なる者の、裏からな覗き見るような、僻

みに歪んで眇^{すが}めに瞋^みる眼に近しき。浅ましき哉。嘆かわしき哉。虚し。
そなたの言うよう考えるべきではない」

妹は黙った。

ヨージャナーガンダーは鬱屈した日々を過ごしていたが、或る時、
姉に誘われてガンダルヴァの演奏を聴きに出かけた。ガンダルヴァは
雷神インドラ（＝帝釈天）の眷属である半神半獣で、音楽を業とする
神団であつた。古来、アプサラスはガンダルヴァを夫とすることが決
まりであつた。むろん例外もあり、人間の王と結ばれたガンダルヴァ
もいたが。

姉はそういうガンダルヴァの姿を見せて恋愛により妹の気を和らげようと謀ったのである。

気の進まぬようであつたヨージャーナードンダーも神々をも楽しませる美しい旋律に陶醉し、恍惚とした。

特に最後に演奏された曲は素晴らしかった。太陽神の馬車を壊すインドラを讃えた詩であつた。輝かしい王者のような太陽神スーリヤの燦々たる永遠の炎のような馬車を打ち壊す。

なぜかヨージャーナードンは激しい憧憬を抱いた。なぜそれが憧憬であつたのか、彼女にもわからなかった。しかしインドラに逢いた

いと切に願う。希うようになった。」

それは運命のなす力だったのかもしれない。

「いかにしたらインドラさまにお逢いできるでしょうか」

ガンダルヴァの長老が応えた。

「奉納の舞をなささい。」

インドラさまに進言しようぞ。インドラさまに深き敬愛と忠誠とを誓うアプサラスが畢生の舞を舞うてお見せしたいと希っていると」

かくして速やかに願いは叶えられ、ヨージャナーガンダーはインドラが統治し、住まう神都アマーラヴァティーに行く。そこにナンダナ

の園があり、インドラは天女たちに囲まれて暮らしているという。アスラ神族から強奪し、操を奪ったシャチーを神妃として。壮麗なる都アマーラヴァティーは厳肅なる城壁に囲まれ、城門は獅子のごとく猛々しかった。

ナンダナの園は東西南北に門を持ち、四隅に尖塔に聳えさせていた。中央には玉座のある神殿ジグラットがあつた。ヨージャナーガンダーはインドラのしもべに導かれ、しずしずと長く鮮やかなペルシャ絨毯の敷かれた廊下を歩む。謁見の間に着いた。怖ろしき魔獣の形相の彫られた大きな扉が開かれ、粛々と進む。

雷霆神インドラは莊嚴に立っていた。

帝釈天とも呼ばれるインドラ（**इन्द्र** 因陀羅）は御者マータリの操る戦車に乗って出陣し、ヴァジュラ（金剛杵）で蛇（ナーガ）族の暴雄であつた悪しき龍神ヴリトラを殺戮した軍神。ヴァジュラは雷を神なる強大な威力ある鎚としたものでもあり、又神の投槍でもあり、又刀剣でもある。金髪を鬘のごとく靡かせ、茶褐色の皮膚は黄金色に輝き、天馬に乗り天空を翔ける戦争の神、大地の女神プリヴィティーと天空の神ディアウスの子、生まれてすぐに捨てられ、放浪のうち様々な闘いを経て終には英雄となった神。初期においては天馬に乗るが、後に

はアイラーヴアタという聖獣に乘るようになる。アイラーヴアタは翼があり、牙が左右に二本ずつある白い巨象で、名の意味は「大海から生まれた者」である。

ヨージャーナーガンダーは舞った。真を尽くし、究竟を求欲する烈しい情熱を持って学んだ奥義の限りを尽くし、天神をも魅了する舞を舞う。神酒ソーマを痛飲し、インドラは大いに称讃した。

「娘よ、実に素晴らしい。神をも飲ばす。見事な真実の体現であつたぞ」

「いいえ。

さようなことはありません。真実には程遠いのです」

「娘よ、汝はなぜさように憂いを見せるか。さように美しく舞う者が」

「大いなる雷の大御神さま、帝釈天さま、霓色の炎の稻妻で燦めく神々しき神聖なるインドラさま、どうかわたくしの憂いを解いてください」

「異なことよ。神や、神の眷属に憂いなどない」

「さようなことはございません。古来、神も憂うのです。歴史に知られています。神さえも色受想行識を超越してはいらないのです。五蘊の苦しみから解脱してはいらないのです。苦しいから五蘊を集めて生き続

けようと足掻くのです」

「聞いたようなことのあるようなことを言う」

「え」

「これから千年の後に釈迦族から聖者が生まれる。その聖者がさようなことを申しておったな」

「その御方とは」

「釈迦族の男、ゴータマ・シッダールタ、仏陀だ」

「シッダールタ……、仏陀とは。なぜかそのお名前がわたくしの胸に強い感情を呼び覚まします。お逢いしたい、その方にお逢いしたい」

「では輪廻転生せよ。不死を捨てよ。それでよいか」

インドラは雷の声を以てさように問い糺したが、ヨージャナーガンダーはまるで生まれる前から決まっていたセリフを言うようにはつきり答えた。この刹那だけ、あたかも過去が未来の種ではなく、未来が過去の因子であることを、強く激しい睿らかさで観じた。どうして原が果^{もと}の因子なのであろうか。なぜ作り手が作品の原なのか。作るのが受動で、作られるが能動であつては、どうしても不都合か。ただ解釈の問題でしかない。すべては生存の都合でしかない。

「構いません」

家に帰ると姉が狂気のように怒っていた。

「何という愚かなことを、気は確かか、そなたのやろうとしていることは狂気の沙汰ぞ」

「いいえ。」

わたくしにも深い考えがあります。不死なる者は不死のゆえに死を超越できません。死すべき人間こそ死を超えられるのです。敢えて死すべき者に生まれようとする者、生に執著せず、死を肯定する者こそ死を超えた者なのです。

そのためには、まず死すべき人間に生まれなければなりません。姉

さま、あなたが何を言おうと、わたくしを牽き裂き殺そうとも、この決意を変えることはできません。

あなたがわたくしを止めようとするならば、わたくしは自らの喉を裂いて憤死するか、もしくははあなたを斬り殺します。いずれにせよ、いかようなかたちであれ、一步前へ進みます」

ガンダヴァティーは言葉を失った。

これが神人而史多の縁起である。これゆえ彼は老衰した釈迦牟尼を觀たのであった。それゆえ宇多^{うだや}哉と栖蛇^{すじや}亜^あ咤^たは不幸に生まれたのであった。

伊與璃はこれらを一刹那の数千秒分の一の瞬間に俯瞰したのである。実際には他にも無数の物語を垣間見ていたが、百数十億ある脳細胞をしても、到底収まり切らず、記憶から消えてしまっていた。自身の縁に深く関わるものだけが強く残っている。茫然としていたが、やがて体が凍えるのを感じ、朦朧としながらも、ふらふら歩んできるよう、蕭々太の家の前に達す。

「あゝ、やっと着いたわ」

玄關に入るなり、伊與璃は嘆息した。

蕭々太はただならぬ様子に吃驚したが、ともかく暖かい部屋に招き入れ、タオルを渡し、尋ねたい言葉を抑えた。伊與璃は問われずも彼女が観た数々の運命を語り出した。

体を拭きながらも語り、坐つても語る彼女の言葉を聴き終えて、蕭々太は沈黙考し、パイプを燻らす。やがて極めて声を抑えつつも、口を開く。

「そうだね。」

一般に、過去は未来の因子と言えるが、未来が過去を呼んでいるの

かもしれないし、いや、もっと直接に未来が過去の原因で、我々の因果関係への理解は実は顛倒しているのかもしれない。

そもそも因果関係というのが解釈の一つに過ぎないからね。

それに、だいたい、解釈などと言ったって、ニューロンをインパルスが伝わり逝くに過ぎないのだから、考えても無意味かもしれない。こういう風に判断するこの思考をも含めてね。理解なんてものは、ニューロンの伝わり方によって分泌される神経伝達物質の起こす感情であって、納得という心的現象に過ぎない。何をどう理解しているのか、そもそも理解って何だって話だよな。

現実はそのでしかない。

古代インド人が現実世界の全現象は、色（物的現象。感受の原因）受（感受。色に拠って起こる感覚作用）想（受に拠って起こる表象作用）行（表象を構成する作用。又事象が構築され、壊れることも言い、諸行無常、遷移をも指す）識（構成されたものを識別する認識作用）、すなわち5つの蘊（五蘊）だと分析したが、まさしくそういうことだね。ん？

あゝ、ごめんね。また君が嫌がりそうな説教臭い話をしてしまった。これが僕の性^{nature}なのさ。

君は、生つてものは、そんな理屈なんかにならないって言うんだろ？

もつと有機的でカタチなんぞにならず、時や所によつても異なり、多様で複雑系的だと。いや、そういう風には君は言わないが、君の主張を僕なりに解析するとそういうことになる。：あゝ、そうだね。

人って面白い。想像も附かないようなことをお互いに考えているんだ。だが、結局、君と僕の考えは同じだし、もしそうでなくとも、同じも違うも大して違わないのさ。同じではない、つてのと“同じ”意味だね。どうだい？ 僕の考えだつて有機的で多様で捉え難く複雑系

な要素を孕んでいるだろう？

生きることは実に興味深い。僕は永遠に死にたくないし、無限に過去に遡りたい。結局、これが生命へと僕らを導く生存の罫で、一切の認識作用の源なのさ。これを否定しても何の意味もない」

伊與璃の不機嫌そうな顔を見て蕭々太は辞いしを止めた。

「あなたの言うことは、つまらないわ。

ま、いつもそうだけれどもね。

どうしてこうやって長く友だち付き合いしていられるのか不思議なくらいね。走馬燈のように移り行く幻影の中に私が観た人たちの激

しい感情、アプサラスの強い感情のリアリティに比べれば、あなたの言い草なんか骸みたいなものよ。

或る意味面白いのかもね。あなたはあなたに都合のいい論の方向にすべてを導き、落とし込んでいるだけ。言葉の辻褄は合っているけれども、あなたは何もわかつちやいないわ。

私は、喩えるならば、遺伝子を超えて諸細胞の中に伝承された生命の倫理が呼吸するのを感じたのよ。その息吹を。生命は絶対だわ。それが唯一の現実なのよ。他に現実があるなんて考えようもない。

もつとも私もこの事があるまでは、あなたの言うような考えに近い

考えを持っていたけれどもね。

それは虚しいわ。考えが合っていても、何も当たってないのよ。そう、生命がないわ。あゝ、言えば言うほど虚しい。運命の波瀾の中に一刹那、強く燦めく輝きの炎に比べれば。

永遠に忘れられない」

蕭々太は溜め息とともに頷く。

「そうだね。

わかったよ。理窟に生命はない（って言うのがもう、理窟だ）。つまり袁毘良の双眸の美しき海、両鈴と喪令の真への念い、真人となつ

た兄妹の非業、君を襲ったヴィヴィッドな現実感覚、それらが一切な
のさ」

窓

